

# 全国市街地の変遷

## 昭和の記憶から次代へ

### 1300年前に開山

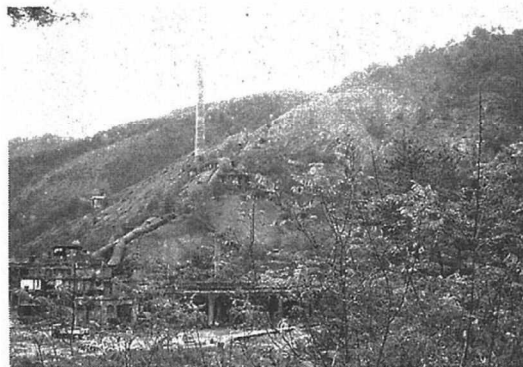
鹿角市は秋田県の北東部に位置し、かつては盛岡藩の領土だったこともあり、県都秋田市よりも盛岡都市圏との結びつきが強い。72年に花輪町、十和田町、尾去沢町、八幡平村が合併し市制を施行した。なお平成の大合併では、県内の市の中で唯一、他の市町村と合併をしなかった。

鹿角市はかつて「鉾山の町」として栄えた。市内の代表

## 秋田県鹿角市・栄えた鉾山の町から観光都市へ



①花輪はやしの風景 (当日は多くの人でにぎわう大通り)



市内の代表的な鉾山である尾去沢鉾山 (全景)

# 豊富で多様な資源を活用

## 十和田八幡平からユネスコ文化遺産まで

的な鉾山である尾去沢鉾山は、開山が約1300年前に遡ると伝えられている。尾去沢鉾山は明治維新以降も採鉱夫が槌と鑿を使って採掘しており、有望鉱脈を持ちながら採鉱効率は低かったが、1893年から岩崎家(三菱)が鉾業権を取得して以降、洋式採掘技術を導入し、出鉱量・製錬量を年々増加させること

となる。その後、閉山されるまでの約90年の間、三菱の経営により鉾山として最大のピークを迎え、我が国産業の近代化を支えた。

鉾山の発展とともに鹿角市は県内でも有数の都市を形成し、明治期には東北地方で最も早く近代文明の影響を受け、住宅に電灯が点り、家庭用水道が完備された。しかし、鉾山資源の枯渇や海外での大規模鉾山の開発による銅価格の低下に伴い、中心産業であった鉾山業は衰退し、地域経済も徐々に衰退していくこととなる。

鹿角市の中心商業地域に位置する地価調査基準地「鹿角(県)5-1」の地価推移は別表のとおりで、83年に調査を開始して以降、97年まで地価は緩やかな推移していたが、同年の1㎡当たり10万8000円を境に地価は徐々に下落し、17年には2万9200円まで下落し、約20年でピーク時の4分の1程度にまで下落している。

鹿角市には、十和田八幡平公園の雄大で美しい自然や、豊富な温泉資源、史跡尾去沢鉾山などの文化施設、日本三大ばやしの一つである「花輪

「ばやし」など数多くの観光資源を有していることから、現在では観光都市としての性格に力を入れている。

## 4月に道の駅開業

また、「花輪はやし」は16年12月にユネスコの無形文化遺産に登録され、登録されて以降、初めて開催された昨年の祭事には多くの観光客が訪れた。現在では十和田大湯地区に著名建築家である隈研吾氏が設計した「道の駅おゆめ」が大湯温泉郷の観光交流拠点施設としてこの18年4月にオープンする予定であり、観光客誘致が期待されている。

(日本不動産研究所秋田支所、不動産鑑定士・平野太郎)

地価調査基準地「鹿角(県)5-1」の地価推移(各年7月時点)

